世田谷区における公園整備の推移に関する研究

養 茂 寿 太 郎*

A Study on the Progress of Public Park Preparation in Setagaya

Toshitaro MINOMO

摘要：本論は、公園整備の推移分析に基づく計画手法研究の一報である。今日、都市の公園整備が多面的に展開されているが、都市計画の実際に直面したとき、公園計画の手法開発の遅れを感じる。と同時に整備の方向を定める思想の欠落に気付く。筆者はこれらの解決にとって、過去の整備の歴史の分析が効果的であると認識している。つまり、この種の手法開発には、現実の都市を対象に公園整備の動向を都市化の流れと対応させて考察する史的研究の手法が有効と考える。本研究では世田谷区を対象に公園整備史を作成する手段を通じ、公園整備に関わる時代的な特異点を都市化の推移と対応させて考察し、公園計画の手法を体系として整理した。

緒言

昨今の都市の公園計画の実際を鑑みると、整備計画の手法開発が求められているにも拘らず、その研究は低調と言わざるを得ない。筆者はこの種の手法開発の基礎的研究として、現実の都市を対象に公園整備の動向を都市化の流れと対応させつつ考察する計画学的史的研究の必要性を感じる。本研究では世田谷区という都市を対象に公園整備の歴史を明らかにしつつ、公園整備の時代的な特異点を考察し、都市化の推移と対応した公園計画の手法体系を検討する。つまり、都市化が推移していく中で、どのような計画手法が公園整備上有効であるかを経験的に検証・検討する。

1. 研究の目的と方法

(1) 研究の目的並びに課題

本研究は都市化の推移と公園整備の関わりを明らかにするなかで、公園整備計画の手法体系を確立することを目的としている。換言するなら本論は、公園整備の推移分析に基づく公園計画手法研究の第一報である。今後、適切な対象都市を幾つか選定して、本報と同様の検討を重ねることによって、普遍的な手法体系へ収斂して行くものと考ええる。

そこで研究の課題は、以下の諸点に整理される。

①公園整備史を、公園計画決定や開園、それに施設整備の観点から編纂すること、②この整備史の中に時代的特性を発見すること、③公園整備に関わる特異点を都市化の推移と対応させて考察すること、④これを基に公園整備上有効とみなされる計画手法を経験的に検証すること

である。

(2) 研究の対象と手法

本報では研究の対象都市として世田谷区を選定した。世田谷区は明治から大正期を通じて総体として農村であったが今や人口80万人の大都市に成長した。世田谷区の都市化の切っ掛けは、明治31年に東京都心寄りの池尻から三宿にかけての一带に野砲兵連隊が立地したことである。これに続いて玉川電車や京王線が開通したことと関東大震災の影響、さらに小田急線、東横線の開通によって、郊外都市を経験しつつ東京を代表する住宅都市の性格で現在へ至った。日本の多くの都市の原点にある城下町などを背景として発達した都市とは違って、世田谷は近代の都市成長の結果がその全てである。

対象空間としてのそうした世田谷区に対し、対象の事象は、世田谷区内にある都市公園、都市計画公園緑地それに児童遊園とした。また、本論では「整備」の意味を計画決定、開園、主要施設整備の範囲とした。

2. 世田谷公園整備史

世田谷区における公園整備の推移を把握するため、文献¹⁾²⁾³⁾並びに行政機関へのヒヤリング等を通じて史料を収集し公園整備史の形に整理したのが表・1である。この年史を都市形成の過程を念頭において注意して考察すると、つぎのような時代区分の中に世田谷の公園整備の変遷が捉えられる。

(1) 戦前の公園整備

世田谷区初の公園が誕生したのは、昭和12(1937)年6月4日のことで、世田谷新町公園の開園である。この

*東京農業大学農学部

公園は土地区画整理事業に関係して昭和10年に秋山紋兵衛氏他6氏より500坪の土地の寄贈を受けたことによる。続いて同年6月の駒留公園、7月の世田谷丸山公園がいずれも上馬土地区画整理組合による土地の提供で開園した。なおこれらの公園より前に兆しが在ったのが蘆花恒春園である。この公園が実際に開園するのは昭和13(1938)年2月27日のことであるが、すでに昭和11年に芦花邸の寄付願が徳富芦花の愛子未亡人より東京市に提出されていて、昭和12年2月に東京市会は芦花邸3698.92坪の寄付受領を議決し、同年6月に芦花の墓地120坪を追加受領して先の開園となるのである。

引続き昭和13年4月に鶴ヶ久保公園と駒繫公園が開園している。鶴ヶ久保公園は下馬土地区画整理組合と野沢土地区画整理組合の共同で提供された土地に東京市が公園の整備をしたものであり、駒繫公園は下馬土地区画整理組合から提供のあった600余坪の土地に隣接する駒繫神社の土地120余坪に地上権を設定して合体させた土地に東京市が公園整備の末に開園したものである。また昭和15(1940)年4月には東横電鉄の所有地に東京市が地上権を設定し、市の公園として世田谷城趾公園を開園した。昭和16年3月の赤松公園、同年5月の三島公園、昭和17年4月開園の小泉公園と続くが、これらは順に宮前第二、深沢、上馬土地区画整理組合より用地の提供があった公園である。

図－1 世田谷の公園分布（戦前・昭和19(1944)年時点）

(2) 戦中の公園整備

周知の通り、昭和7(1932)年に東京緑地計画協議会が発足し大東京の広域緑地計画の策定が始り、昭和14(1939)年4月の内務大臣報告により計画の策定は終了する。世田谷はこの東京緑地計画で昭和8年1月に対象区域の一部となり、結果的に本区の一画に環状緑地帯と大公園が計画された。その大公園の一つが、昭和15年3月30日内務省告示の砧緑地で、これは紀元2600年記念事業として早速事業決定され、昭和16年には230,072坪を買収したものの、昭和18年には「食糧増産緊急対策」に

より、農業実行組合にその約60%が貸付けられた。

またもう一つは昭和17年に計画決定をみた駒沢緑地である。この土地は、大正2(1913)年に私有農地の賃貸契約により東京ゴルフ倶楽部が駒沢ゴルフ場を開設していたところで、昭和5(1930)年の東京ゴルフ倶楽部朝霞移転まで東京付近唯一のゴルフ場であった。その後も目蒲電鉄がゴルフ場として経営していて、昭和12年には第12回オリンピック大会の会場候補地にあげられたが、これは中止となり、「東京緑地計画」で大公園の候補地となり昭和17年に防空緑地となるのである。昭和18年9月にはこの土地を東京都防衛局が買収し、駒沢決戦緑地計画の立案等がなされた。その他東京緑地計画に関係して、昭和15年に羽根木緑地、昭和16年に玉川野毛町緑地、昭和18年に祖師谷緑地の計画決定をみるが、計画決定以上の整備は見られない。これらの3緑地が公園として開園するのは後のことである。

(3) 戦後復興期の公園整備

戦後復興期の公園整備は、戦災復興都市計画に始る。昭和21(1946)年4月に世田谷緑地が計画され、これは昭和25年3月に東京特別都市計画公園緑地として計画決定をみる。そして昭和30年12月に都市計画公園として事業決定され、整備が進み昭和34年に開園する。先に計画決定されていた玉川野毛町緑地と羽根木緑地も昭和31年に公園として開園している。

昭和22(1947)年に児童福祉法が制定され、児童厚生施設としての児童遊園を整備することになり、昭和25(1950)年に経堂児童遊園と砧児童遊園が世田谷初として開園する。児童遊園の整備はその後、昭和26年の桜丘児童遊園、すみれ児童遊園、廻沢児童遊園、昭和27年の北沢児童遊園、かさ守稲荷児童遊園、九品仏児童遊園、等々力不動児童遊園、船橋児童遊園と飛躍的に進む。

この頃になって、東京都が小公園を各区に管理移管するようになる。世田谷区では、まず昭和25年10月1日に世田谷城趾公園、駒留公園、世田谷丸山公園、駒繫公園、鶴ヶ久保公園、赤松公園、小泉公園が、また昭和28年4月1日に南原公園、野沢公園、下馬公園、子の神公園が管理移管される。世田谷区の行政組織としては、昭和38年に土木課の中に公園係が誕生する。

また、東京緑地計画によって設定された駒沢、砧の二大緑地も戦後のまちづくりの中で整備の変容を見る。東京緑地計画の所期の位置付けでは大公園であった駒沢と砧も実現の時点では防空緑地の性格下にあった。終戦を迎えこの性格は当然のこととして不要になり、東京緑地計画の当初のイメージに戻される。まず駒沢緑地は、昭和22年12月に自作農特別措置法により農林省が土地を買収し国有地となったが、昭和23年12月の都議会で駒沢緑地総合運動場設置を内定し再び都用地とした。そして昭和24年10月には第4回国体の会場となり、終了後は教

育庁が管理することとなった。そうした状況下において昭和26年に東京急行電鉄の寄付をうけて駒沢球場を建設することを決定し、二年後に球場は完成する。昭和35年に駒沢総合運動場は駒沢公園に性格を変更し、39年12月の駒沢オリンピック公園開園となるが、そこには、第三回アジア大会や第18回オリンピック大会の国家的イベントが深く関わっている。一方砧緑地は、昭和21年10月の自作農創設特別措置法施行により、23万坪の44.3%が解放区域になる。そうした中で、牧場公園や都市農場の構想が立案されたりするが、これは実現せず、昭和24年になって野球場と野営場が新設され、昭和26年に東急より砧ゴルフ場建設と管理の申請を受けるわけである。その結果昭和30年に『東京都砧ゴルフ場条例』を施行し、昭和41年4月15日までの約10年契約でゴルフ場の供用を開始した。

図－２ 世田谷の公園分布（戦後・昭和39(1964)年時点）

(4) 転換期の公園整備

駒沢は日本を代表する運動公園として整備を進め、砧は民間の事業力を導入することによって戦後復興期の公園整備を進めた。国家的公園としての駒沢を都民の公園へと改造する動きはオリンピック終了後まもなくあった。昭和40年開設の軟式野球場、昭和41年の水泳場、昭和45年の硬式野球場やサイクリング道路の開設がそれらである。またパブリック・コースとはいえ民営のゴルフ場を主体とする変則的供用であった砧公園は昭和40年12月にこれを廃止し、翌昭和41年5月5日にファミリーパークとして開園する。

昭和25年の7公園や28年の4公園はいずれも小公園の区移管であったが、昭和40年に世田谷、羽根木、玉川野毛町の中規模3公園が管理移管された。そんな羽根木公園に昭和43年4月、昭和44年3月には多摩川河川敷の一面に交通公園が開園する。また前記のように昭和45年には駒沢公園、昭和46年5月には砧公園にサイクリング道

路が開設される。そして昭和44年12月1日に世田谷区初の緑道として玉川上水緑道が、昭和48年3月に北沢川緑道、昭和50年に烏山川緑道、蛇崩川緑道、呑川緑道が開園し、公園から緑道への時代が到来する。これらはこの頃の都市問題すなわち交通戦争や歩行者優先思想を反映している。その一方で自然への希求もこの頃から強くなる。昭和47年11月に東京都より等々力溪谷の負担付き無償譲与受入れを区議会が議決し、昭和49年に等々力溪谷公園が開園する。つりがね池公園が開園したのもこの年で、共に自然保全活用型の公園である。

なおこの時代の一つの特徴として、昭和52(1977)年3月開園の羽根木小緑地、用賀小緑地、神祖師谷小緑地、千歳台小緑地、八幡山小緑地以後の開発者負担による小緑地整備の動きがあった。

(5) 成熟期の公園整備

世田谷区の自然的特徴は、多摩川と国分寺崖線にある。したがって、自然の保全対象はこの一帯に集中する。等々力溪谷公園やつりがね池公園が自然保全ないしは活用型の先駆的公園として開園した後、昭和51年に上野毛自然公園、昭和52年に岡本公園、昭和58年次大夫堀公園、昭和63年の岡本静嘉堂風致公園とつづき、さらに昭和61年の兵庫島公園、丸子川親水公園の開園により世田谷の公園整備はいよいよ多摩川にアプローチするようになる。

これとは別に、昭和54年7月には国際児童年を記念して羽根木公園の一角にプレーパークを設営し、同様のことは昭和57年6月の世田谷公園へと拡大する。昭和61年3月には都立砧公園の一面に区立世田谷美術館が開館するが、これは都立公園に対する地元区の論理に基づく一つのアプローチの仕方として注目される。昭和48年以降

図－３ 世田谷の公園分布（平成元(1989)年時点）

農政の一貫としてなされてきた区民農園制度の実績を踏まえて、昭和61年に瀬田農業公園が開園した。

表－１ 世田谷公園整備史年表

年月日付けの記録	公 園 整 備 事 象
昭和 8 (1933) 年 1月 25日	世田谷区域が東京緑地計画協議会による「東京緑地計画」の対象区域に決定
昭和11 (1936) 年 9月	徳富芦花の愛子亡亡人が芦花邸の寄付願を東京市に提出
昭和12 (1937) 年 2月 10日	東京市会が芦花邸の寄付受領 (3698.92坪) を議決
昭和12 (1937) 年 2月 26日	徳富芦花墓地の区域 (120坪) を追加受領。
昭和12 (1937) 年 6月 4日	世田谷新町公園開園
昭和12 (1937) 年 6月 29日	駒留公園開園
昭和12 (1937) 年	第12回オリンピック大会の開催会場候補地に駒沢ゴルフ場跡地が決定
昭和12 (1937) 年 7月 31日	世田谷丸山公園開園
昭和13 (1938) 年 2月 27日	蘆花恒春園開園
昭和13 (1938) 年 4月 29日	鶴ヶ久保公園、駒鑾公園開園
昭和14 (1939) 年 4月 22日	「東京緑地計画」により本区の一部に環状緑地帯と大公園が計画される
昭和15 (1940) 年 1月 18日	羽根木緑地計画決定
昭和15 (1940) 年 3月 30日	砧緑地計画決定、紀元2600年記念事業として事業決定
昭和15 (1940) 年 4月 27日	世田谷城趾公園が東横電鉄所有地に東京市が地上権を設定する手法で開園
昭和16 (1941) 年	砧緑地の内 230,072坪を買収
昭和16 (1941) 年 3月 8日	赤松公園開園
昭和16 (1941) 年 5月 21日	三島公園開園
昭和16 (1941) 年 6月 16日	玉川野毛町緑地計画決定
昭和17 (1942) 年 4月 28日	小泉公園開園
昭和17 (1942) 年 1月 31日	駒沢緑地計画決定
昭和18 (1943) 年 6月	砧緑地の約60%を食糧増産緊急対策のために農業実行組合に貸付
昭和18 (1943) 年 8月 4日	祖師谷緑地を計画決定
昭和18 (1943) 年 9月	駒沢緑地の土地を東京都防衛局が東急より買収
昭和20 (1945) 年 3月 10日	砧緑地へ空襲
昭和21 (1946) 年 4月 25日	戦災復興都市計画として世田谷緑地を計画決定
昭和21 (1946) 年 10月	自作農創設特別措置法が施行され砧緑地の内44.3%が解放区域になる
昭和21 (1946) 年	砧緑地を対象に牧場公園や都市農場を内容とする生産緑地構想を立案
昭和22 (1947) 年 12月	自作農特別措置法により駒沢緑地を農林省が買収し国有地となる
昭和23 (1948) 年 12月	駒沢緑地総合運動場設置を都議会が内定し再び都有地となる
昭和24 (1949) 年 10月	駒沢緑地が第4回国体のハンドボールとホッケー会場となり終了後教育庁が管理
昭和24 (1949) 年	砧緑地に野球場と野営場を新設
昭和25 (1950) 年 3月	世田谷公園を東京特別都市計画公園緑地として計画決定
昭和25 (1950) 年 3月 31日	経堂児童遊園と砧児童遊園が世田谷初の児童遊園として開園
昭和25 (1950) 年 10月 1日	世田谷城趾公園、駒留公園、世田谷丸山公園、駒鑾公園、鶴ヶ久保公園、赤松公園、小泉公園が世田谷区に管理移管される
昭和26 (1951) 年 3月	東京急行電鉄の寄付により駒沢球場建設を決定。『駒沢総合運動場設置条例』施行
昭和26年	この年に、桜丘児童遊園、すみれ児童遊園、廻沢児童遊園が開園
昭和26 (1951) 年 5月 5日	砧緑地で上野動物園の移動動物園「象のあるこども会」を開催
昭和26 (1951) 年 9月	東急より砧ゴルフ場建設と管理の申請出る
昭和27年	この年に、北沢児童遊園、かさ守稲荷児童遊園、九品仏児童遊園、等々力不動児童遊園、船橋児童遊園が開園
昭和28 (1953) 年	駒沢球場完成
昭和28 (1953) 年 4月 1日	南原公園、野沢公園、下馬公園、子の神公園が世田谷区に管理移管される
昭和30 (1955) 年 12月 5日	『東京都砧ゴルフ場条例』を施行し、ゴルフ場の供用を開始
昭和30 (1955) 年 12月 12日	中央競馬会所有の馬事公苑を公園として都市計画決定
昭和31 (1956) 年 7月 7日	都指定史跡「野毛大塚古墳」の一角を都立玉川野毛町公園として開園
昭和31 (1956) 年 10月 1日	羽根木公園が都立公園として開園
昭和32 (1957) 年 4月 1日	都立砧公園開園
昭和32 (1957) 年 12月	芦花公園（芦花恒春園8.3haを含む）を都市計画決定
昭和32 (1957) 年 12月 21日	祖師谷緑地、九品仏、等々力溪谷、芦花公園、弦巻公園、若林公園を都市計画公園として計画決定、多摩川緑地を都市計画緑地決定
昭和32 (1957) 年 12月	都市計画公園として世田谷公園を事業決定
昭和33 (1958) 年	駒沢運動場を第3回アジア競技大会バレーボール競技会場に決定
昭和34 (1959) 年 6月	駒沢運動場を第18回オリンピック大会の第二会場に決定
昭和34 (1959) 年 8月 22日	都立世田谷公園開園
昭和34 (1959) 年 9月	「蘆花会」より芦花公園の拡張計画に対する要望書が提出される
昭和35 (1960) 年 3月	駒沢総合運動場を都市計画駒沢公園に変更
昭和35 (1960) 年 12月	多摩川遊園開園
昭和36 (1961) 年 2月 28日	大蔵総合運動場建設請願（区民6万人署名）提出
昭和36 (1961) 年 4月	大蔵総合運動場建設計画策定準備会発足
昭和36 (1961) 年 4月	駒沢オリンピック公園（約41ha）基本計画の策定
昭和37 (1962) 年 11月	大蔵総合運動場建設推進本部を区役所内に設置
昭和38 (1963) 年 4月	世田谷区土木課の中に公園係を設置
昭和38 (1963) 年 6月	砧公園内に厚生大臣が事業認可を受け厚生年金スポーツセンターを建設
昭和39 (1964) 年 5月	世田谷区総合運動場基本計画を（財）都市計画協会に依託
昭和39 (1964) 年 7月	駒沢オリンピック公園竣工式
昭和39 (1964) 年 12月 1日	都立駒沢オリンピック公園として開園
昭和40 (1965) 年 3月	駒沢オリンピック公園に軟式野球場開設
昭和40 (1965) 年 4月	世田谷公園、羽根木公園、玉川野毛町公園が区に移管される
昭和40 (1965) 年 12月 5日	砧ゴルフ場廃止
昭和41 (1966) 年 5月 5日	砧ゴルフ場跡をファミリーパークとして開園
昭和41 (1966) 年 6月 28日	大蔵総合運動場体育館供用、東京都市計画公園事業砧公園の一部事業として区長が執行
昭和41 (1966) 年 7月	駒沢オリンピック公園に水泳場開設
昭和41 (1966) 年 10月	東名高速道路の建設により大蔵総合運動場の基本計画変更
昭和41 (1966) 年 12月	東名高速道路用地として砧公園の一部（41360㎡）を廃止
昭和42 (1967) 年 3月 1日	『世田谷区立砧運動公園用地買収基金設置及び管理に関する条例』を制定
昭和43 (1968) 年 4月	芦花公園追加（3,409.41㎡）買収開園
昭和43 (1968) 年 4月	羽根木公園に交通公園開園
昭和43 (1968) 年 6月 1日	多摩川河川敷に宇奈根公園を運動公園として開園
昭和43 (1968) 年 9月	世田谷公園改修基本構想を東京100年記念事業として懸賞募集
昭和43 (1968) 年 10月 1日	松原公園開園（全面買収区立第1号）
昭和44 (1969) 年 3月	多摩川河川敷に交通公園開園
昭和44 (1969) 年 6月 1日	多摩川河川敷に多摩川玉川公園を風致公園として開園
昭和44 (1969) 年 6月 1日	芦花公園追加（14,237.44㎡）買収開園
昭和44 (1969) 年 12月 1日	世田谷区初の緑道として玉川上水緑道開園
昭和45 (1970) 年 2月	大蔵総合運動場は陸上競技場の完成を以て整備完了
昭和45 (1970) 年 6月 1日	多摩川河川敷に多摩川二子橋公園を運動公園として開園
昭和45 (1970) 年 8月	駒沢オリンピック公園に硬式野球場開設
昭和45 (1970) 年 11月	駒沢オリンピック公園にサイクリング道路開設

昭和46 (1971) 年	都市計画祖師谷公園の一部3,683.45㎡を買収
昭和46 (1971) 年 4月 1日	世田谷区土木部公園課(2係)設置
昭和46 (1971) 年 5月	砧公園にサイクリング道路開設
昭和46 (1971) 年 6月 1日	芦花公園追加(22,542.04㎡)買収開園
昭和47 (1972) 年 6月 1日	芦花公園追加(1,691.24㎡)買収開園
昭和47 (1972) 年11月	東京都より等々力溪谷公園の負担付き無償譲与受入れを区議会議決
昭和48 (1973) 年 3月31日	北沢川緑道開園
昭和48 (1973) 年 4月 1日	環境部環境整備課に緑化係を設置
昭和48 (1973) 年10月 1日	こどものひろば公園が近隣公園として開園
昭和49 (1974) 年 3月31日	等々力溪谷公園、つりがね池公園が風致公園として開園
昭和49 (1974) 年10月 1日	駒沢緑泉公園が近隣公園として開園
昭和50 (1975) 年 3月31日	烏山川緑道、蛇崩川緑道、呑川緑道開園
昭和50 (1975) 年 6月 1日	都立祖師谷公園一部開園
昭和51 (1976) 年 3月31日	上野毛自然公園が風致公園として開園
昭和51 (1976) 年 3月31日	多摩川河川敷に多摩川遊園を風致公園として開園
昭和51 (1976) 年 4月 1日	世田谷区土木部公園課(3係)4公園事務所体制
昭和52 (1977) 年 3月31日	岡本公園は風致公園、希望丘公園は近隣公園として開園
昭和52 (1977) 年 3月31日	羽根木小緑地、用賀小緑地、神祖師谷小緑地、千歳台小緑地、八幡山小緑地開園
昭和52 (1977) 年 4月 1日	『自然環境保護条例』制定
昭和53 (1978) 年 月	この年より羽根木公園で「せたがや梅まつり」を開催
昭和53 (1978) 年11月	『多摩川緑地広場管理公社』を大田区と共同で設立
昭和54 (1979) 年 3月23日	次大塚堀を都市計画緑地として計画決定
昭和54 (1979) 年 4月 1日	世田谷区土木部公園課(5係)4公園事務所体制、環境部みどりの課設置
昭和54 (1979) 年 7月21日	国際児童年を記念して羽根木公園の一面にプレーパークを設置
昭和55 (1980) 年 4月 1日	『世田谷区遊び場設置及び管理に関する要綱』を区長決定
昭和56 (1981) 年 6月	砧公園にバードサンクチュアリー開設
昭和56 (1981) 年12月 1日	世田谷区土木部公園課の土地を借受けて大蔵三丁目公園を風致公園として開園
昭和57 (1982) 年 5月	世田谷公園に区政50周年記念事業の一貫としてミニS L開通
昭和57 (1982) 年 6月 6日	世田谷公園の一面にプレーパーク設置
昭和58 (1983) 年 3月31日	次大塚堀公園が風致公園として開園
昭和59 (1984) 年 8月	世田谷区自然環境保護計画策定
昭和61 (1986) 年 3月30日	砧公園の一面に世田谷美術館開館
昭和61 (1986) 年 3月31日	瀬田農業公園は特殊公園、兵庫島公園と丸子川親水公園は風致公園として開園
昭和62 (1987) 年 7月 1日	世田谷区土木部公園課(5係)5公園事務所体制
昭和63 (1988) 年 3月31日	岡本静慈堂一帯の緑地が風致公園として開園

3. 都市化の推移と公園整備の特異点

以上、約50年の史実を整理した結果から明らかなように、世田谷の公園整備は都市化の推移の中で幾つもの特異点を表情として持っている。すなわちその表情とは、戦前期の用地寄付による公園整備時代、戦中の大公園計画時代、戦後復興期の小公園増設と既設公園の施設整備時代、その後の転換期にみられた区民のための公園整備時代、そして成熟期の本質的公園整備時代である。また、この表情を時代的推移としてだけではなく計画学的視点から考察すると、図-4の東京23区都市圏における世田谷区の都市化度⁵⁾の推移、図-5の世田谷区内の地域的都市化度の推移を参考に次の2点が指摘できる。

(1) 公園用地の確保とマスタープランの意義

徳富芦花は、大正元(1912)年頃のこの附近の様子を『みみずのたはこと』の中で、「粕谷は純農村の武蔵野から都会付属の菜園になりつつある」と述べている。明治から大正にかけてはほとんど農村地帯であった世田谷も大正元年に東京信託により新町分譲住宅地が形成され、大正11年には田園調布開発、大正14年の成城学園開発が起り、さらに昭和2年には玉川全圃耕地整理組合が設立されて、武蔵野が遠退き公園を必要とする都市へと変って行く。区内では土地区画整理事業が次々と企画され、まちづくり創生期のユートピア的公園整備がはじまる。その背景の一部としては、昭和7(1932)年内務次官通牒として出された土地区画整理に際しては地区総面積の3%以上を公園地として保留するという旨の区画整理地区内の公園保留基準や昭和10年の「東京市土地区画整理助成規程」があった。こうした一連の区画整理の中での公

園整備の動きは、大都市の住宅地形成の中で謂わば可能性の論理の中でなされていたに過ぎない。なぜなら、田園調布開発では宝来公園が誕生し、その他地上権の設定によって公園地の確保をした例もあったが、公園の無いまちとしての成城や新町も誕生したからである。図-4にみる都市化の状況に在って昭和10年頃に「東京緑地計画」が立案されたが、これは所期において壮大な公園配置計画を内容としていた。ところが途中から防空対策の意味が強くなり拠点としての防空緑地を確保した他、環状緑地帯は防空空地帯となり、戦災復興の特別都市計画法により緑地地域となった。緑地地域制度の廃止により旧緑地地域は区画整理事業を通して公園整備を図りながら今日のまちづくりを進めることになるわけである。このようにみえてくると、「東京緑地計画」と言う必要性の論理に基づくマスタープランは世田谷の公園整備にとって相当の意義をもったことになる。

(2) 目的・手段説の考えにたった公園整備

公園整備の歴史をひもとく中で、最近の動きを成熟期における本質的公園整備時代として捉えた。筆者がそこに「本質的公園整備」という言葉を当てたのは、大都市の自然の保全と公園整備との関わりが図-5から読取れる都市化の状況を背景に密接になってきていることや、プレイパーク運動並びに農業公園の整備にみられるような利用プログラム発想型公園整備が積極的になされるようになったのがこの時代の特徴だからである。前者は、特に国分寺崖線の緑を保全する目的での公園整備とみなされるが、この一帯は昭和8(1933)年に多摩川風致地区としての指定を受け、古くは多摩川八景として親しまれ、

図-4 東京都市圏における世田谷区の都市化度

図-5 世田谷区の都市化度

昭和初期には東京の別荘や別邸が立地した土地柄である。そうした土地の自然環境を保全するために、昭和49年以降、10年間で10の風致公園を開園するのである。これら一連の公園整備は、自然環境の保全と言う目的を達成する手段として有効に機能したものである。また後者についても、公園利用というソフト面から目的を設定し、その目的達成の舞台としてハードな空間を整備するという、目的に連動して手段的に公園を整備する傾向がうかがえる。

結 言

本研究の目的は都市化の推移と公園整備の関わりを明らかにしつつ公園整備計画の手法体系の一端を究明することにある。研究課題に対し、得られた所見を整理すると以下になる。

1) 公園整備史を作成した結果、世田谷の公園整備は戦前期の用地寄付による公園整備時代、戦中の大公園計画時代、戦後復興期の小公園増設と既設公園施設整備時代、その後の転換期の区民のための公園整備時代、そして成熟期の本質的公園整備時代という表現で時代特性を発見できる。2) また、そうした公園整備に関わる特異点を都市化の推移と対応させて考察した結果、公園用地の確

保にとってマスタープランの存在が有効であり、それは「目的-手段説」に基づく公園整備としても説明される。3) したがって、今後の公園計画手法研究の目標は、マスタープランに基づく計画決定の手法開発を含め、計画の目標とそこに辿りつく為の手段を峻別した公園計画手法の確立にあると言える。つまり必要性の論理と可能性の論理⁶⁾の双方から検討される計画手法のシリーズが、都市の公園整備体系の骨子であると考えられる。

参考文献および注釈

- 1) 世田谷区公園課(1990):「世田谷区都市公園等調書」: 世田谷区
- 2) 東京市役所発行の公園案内パンフレット
- 3) 東京都(1974):「東京の公園100年」: 東京都建設局
- 4) 佐藤 昌(1977):「日本公園緑地発達史」: 都市計画研究所
- 5) 都市化度とは、単位区域の人口を分母とし特定区域の人口を分子として算定される値である。この値を面積按分して都市化度図を作成する。
- 6) 蓑茂寿太郎(1986): 既成市街地の画地特性に基づく都市緑化と緑のネットワーク化に関する研究: 造園雑誌 49(5)

Summary : In urban park planning, it is important to examine the historical changing process on park-system development. But in Japan, the historical aspects of park development have not been clear until today.

Then, in this paper, I dealt with the development history of public urban park in relation to the urbanization case of Setagaya-ku in Tokyo.